

みかんを通じた交流サポートシステム
「オレンジサポートシステム」

2011年1月25日

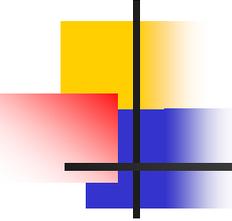
三ヶ日町農業協同組合
株式会社ツーリズム・マーケティング研究所

三ヶ日地区の概要

～おいしいみかんをはぐぐむ町 三ヶ日

- 三ヶ日町は、静岡県西部の浜名湖に臨むエリアに位置し、奥浜名湖の温暖な気候と古生層の土壌に恵まれ、古くからみかんの栽培が始まり、明治初期にはすでに全国に馬で運ばれ、味のよさが知られていたといわれています。
- 昭和33年になって国有林の払い下げによる集団開墾が盛んになると、栽培面積が急増、今では全国的に知られる「三ヶ日みかん」の名声を確立しました。





三ヶ日地区の産業維持

～地域が直面する課題

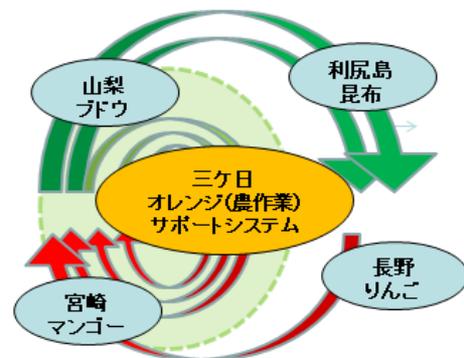
農業（果樹農業）は、労働力の季節波動が大きな産業

→かつては伝統的な周辺地域の農家同士による互助システムが機能
農家の全体的な高齢化、都市部における定期的なアルバイト先の充実などにより労働力の提供システムが機能しなくなっている現状。

- 三ヶ日地区は、みかんの収穫時期の作業員確保が困難な状況になりつつある。
- 全国各地の過疎地でも同様の課題が生じており、農産物等がありながら収穫できない状況は、「販売機会ロス」が発生し、農家の経営そのものを脅かす恐れがある。

オレンジサポートシステムの概要

- 農業収穫期における収穫員の確保
→三ヶ日地区に繰り返し訪れるサポーター(作業員)を確保(都市部のシニア層)
→地域外へ派遣し、全国の農業収穫作業員の不足を補う人材のネットワーク化
(全国規模の交流サポートシステム)
- 農作物の販売促進チャネルとしての期待
→サポーターを全国規模で動かし、農産物、特産物の口コミ効果や地域間交流を狙う。(草の根的な販促)



オレンジサポートシステム構築にむけた活動

■サポートシステム構築に向けた基礎調査

1. 組合員に対する調査

→ ・JAみっかび組合員に対して「収穫作業員(切り子さん)」に関する意向調査を実施

2. 収穫員に対する調査

→ ・収穫作業員(切り子さん)に対して援農に対する意識、現状の収穫作業の状況に関する調査を実施

3. 不動産調査

→ ・収穫員を地域で受け入れるための空き家・不動産物件などの現況調査を実施

4. 他地域の現況調査

→ ・連携可能な地域の現況調査(富良野・出雲)

■基礎調査の結果(抜粋)

■農家の高齢化に伴い、収穫期のみかん収穫作業員(切り子さん)の慢性的な不足が続いている。

■みかん農家の約60%が3年後には「みかん収穫作業員が十分に確保できないと思う」と回答している。

■みかん収穫作業の魅力は、「健康的に仕事できた」(65.1%)が最も多く、次いで「楽しく話しながら仕事できた」「楽しみながら収入が得られた」などの回答が多く、仕事の大変さ以上に楽しさを感じているみかん収穫作業員が多いとみられる。

■みかん収穫作業員のうち70%以上が他地域での収穫作業への従事に関して興味を示した(「非常に興味がある」との回答が24%、「やや興味がある」が約48%)。他地域への就業の希望期間では、「1ヶ月程度」との回答が約36%で最も多い。

■三ヶ日地区の世帯数に占める割合を算出すると0.9%に過ぎない。今回調査では、店舗専用施設や賃貸物件については除外しているが、全国と比較してかなり低い水準にとどまっている

オレンジサポートシステム構築に向けて

■体制構築に向けた研究

1. 収穫作業員の確保・育成の研究

・既存の収穫作業員だけでなく、新規に収穫作業員を確保するため、収穫作業員の確保に向けたスキームの検討。

例：短期体験型→収穫作業員登録→作業員化
・農業収穫員として活躍するだけでなく、地域の産業支援（農業を支援）する人材として支援可能な業務及び従事の可有無について検討。

例：地域の農業に対する理解を深めてもらうため、加工・販売に対する支援の可能性など

2. 連携可能地域の模索と可能性

・オレンジサポートシステムを機能させていくためには、人材を確保し、徐々に規模を拡大し、普及させていく必要がある。したがって、三ヶ日周辺の地域において果樹農業を営む地域の農業の現状、及び受け入れの可能性について検討を行った。
(長野県内、山梨県内、愛知県内の一部地域)

■今後の取組み

共通の課題を抱える地域と連携し、
サポートシステムの始動

オレンジサポートシステムの

目指すところ

—社会インフラとして確立する—

農業収穫作業員の全国ネットワーク化（オレンジサポートシステム）は、生産年齢人口の減少により農業収穫作業員の確保が困難になっている全国的な課題を解決するモデルとして期待される。